第1章　　出生から渡台まで

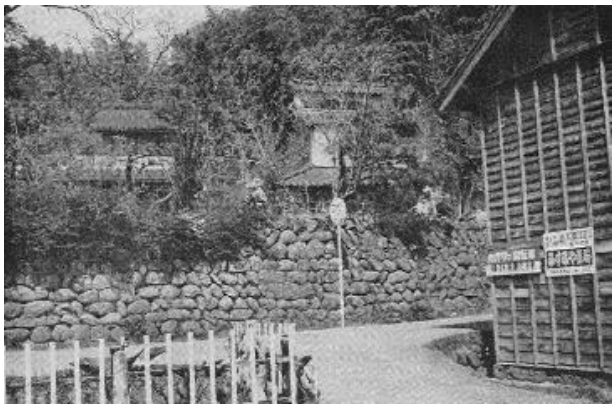
台北市　台湾総統府（旧総督府）

1　熊本県田原村（現益城町田原）で出生

志賀哲太郎は慶応元（1865）年8月28日上益城郡田原村（現益城町田原）の鍛冶屋志賀甚三郎の長男として生まれた。台湾鐵砧山にある哲太郎の墓碑には慶応２年8月28日生まれとあるが、戸籍上は慶応元（1865）年生まれで幼名は岩太郎といった。生家は中村家の敷地内にあったが、現在は畑となっている。平成28(2016)年4月の熊本地震で石垣の一部が崩壊した。土地の所有者中村啓一氏によると、今でも畑から鉄片が出てくるとのことである。東隣の浄信寺の過去帳には哲太郎の両親の名がある。南側には魚釣りをして遊んだ木山川が流れ、その上流にこの村の惣庄屋であった矢嶋家がある。同家は産業を振興し、学問を尊ぶ施策を行ったので優秀な人材を多く輩出した。特に矢嶋家の四賢婦人（竹崎順子、徳富久子、横井つせ子、矢嶋楫子）は有名である。こうした環境の中で哲太郎は向学心旺盛な子供へと育った。

木山川　H29.5撮影

生誕地の標木H29.12.29建立　志賀哲太郎顕彰会
（書：宮本睦士、文：折田豊生）



石垣右上が生家跡　（昭和40年代撮影）

熊本地震で崩れた石垣　H28.5撮影

矢嶋家家屋（益城町教育委員会提供）

矢嶋家家屋跡（徳富蘇峰生誕の地）
H30.1撮影

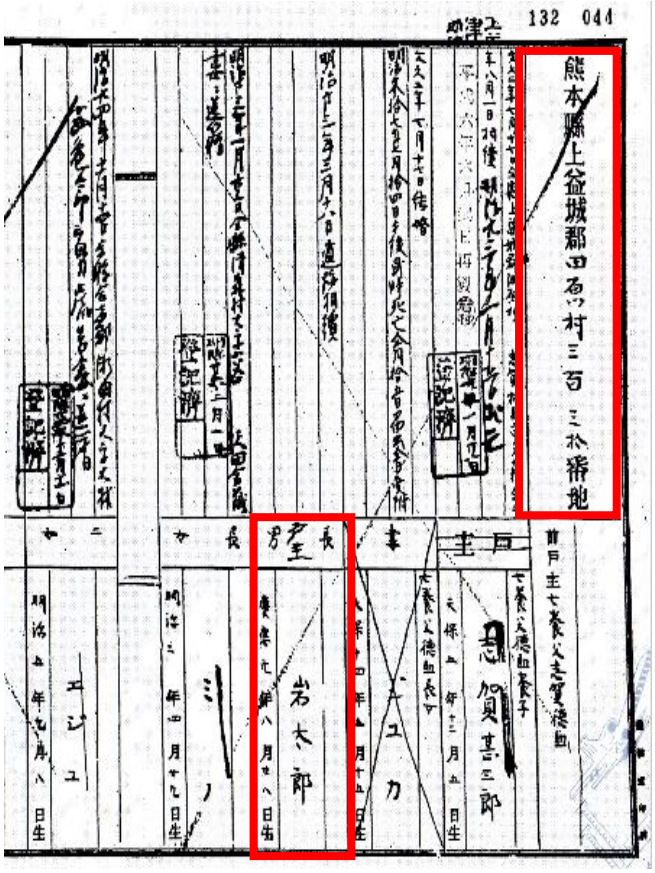
竹崎順子（三女）
熊本女学校設立

徳富久子（四女）
蘇峰・蘆花の母

横井つせ子（五女）
小楠の妻

矢嶋楫子（六女）
女子地位向上先覚者

手前の畑が生家跡　H28.12撮影

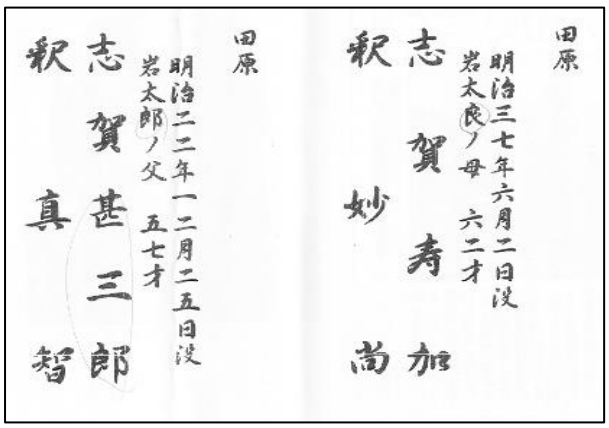


熊本縣上益城郡田原村三百三拾番地

戸主　志賀甚三郎

長男　岩太郎　慶応元年八月廿八日生

益城町役場発行の戸籍謄本（澤田寛旨氏提供）



田原
明治三七年六月二日没
岩太郎ノ母　六二才
志賀寿加
釈妙尚

田原
明治二二年一二月二五日没
岩太郎ノ父　五七才
志賀甚三郎
釈真智

浄信寺の過去帳（浄信寺、弘谷多喜夫氏提供）

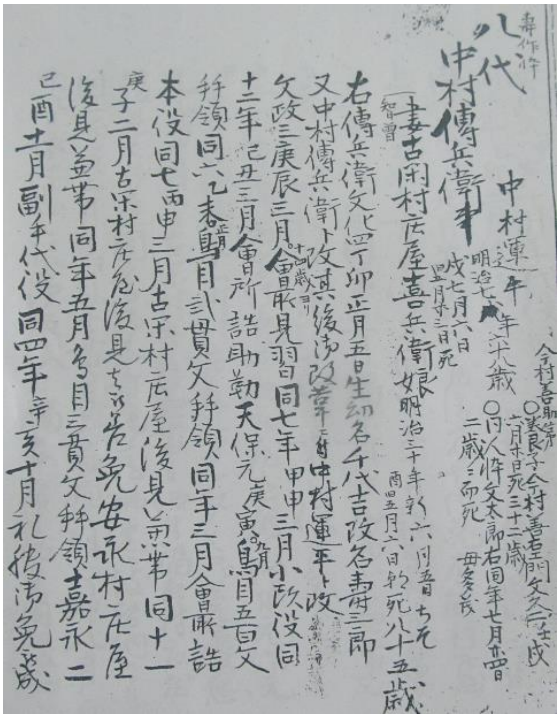
2　中村傳兵衛のてほどき

哲太郎は、隣家の第八代当主中村傳兵衛（1807～1874）に気に入られ、家族同然に可愛がられた。読み書きの手ほどきを受け、同家の書籍箱から本を取り出しよく読んだそうである。現在第13代中村啓一氏宅に哲太郎が読んだ本が保存されている。第10代中村文太氏の三女トヨカは「志賀哲太郎氏は少年時代中村家の地所内に住み利発で向学心旺盛な少年で第八代傳兵衛に師事した。師に対する敬愛の念が厚く傳兵衛死後も任地から珍しい産物が届けられた」と回想している。この回想メモは、トヨカが昭和41年の志賀先生生誕百年祭の朝日新聞記事と一緒に保管していたものである。また中村啓一宅には、哲太郎が大正6年中村文太氏に出した年賀葉書がある。哲太郎の直筆で書かれたもので現存しているのはこれだけである。

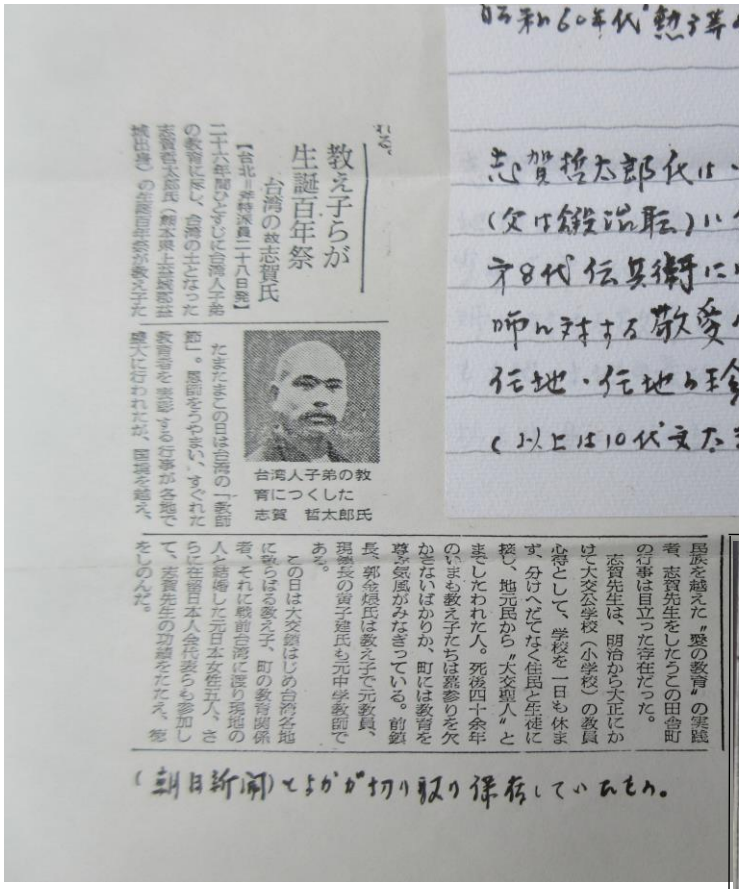
第八代中村傳兵衛の墓
（中村啓一氏提供）

哲太郎が読んだ本と傳兵衛作成の米穀類帳簿
H28.12撮影

哲太郎が読んだ書籍　　H28.12撮影



傳兵衛関係記録（中村啓一氏提供）



昭和60年代 熱子等の内意あるも辞退している。

志賀哲太郎氏は少年時代中村家の地所内（父は鍛冶職）に住み利発で好学の少年で第8代伝兵衛に師事す。
師に対する敬愛の念厚く伝兵衛死後も位牌・位牌の珍しい遺物が届けられた。
（以上は10代文太三女とよがの話である。）

教え子らが
生誕百年祭
台湾の故志賀氏

【台北＝特派員二十八日発】二十六年間ひとすじに台湾人子弟の教育に尽し、台湾の土となった志賀哲太郎氏（熊本県上益城郡益城出身）の生誕百年祭が教え子たちによって盛大に行われたが、国境を越え、民族を越えた〝愛の教育〟の実践者、志賀先生をしたうこの日曾町の行事は目立った存在だった。

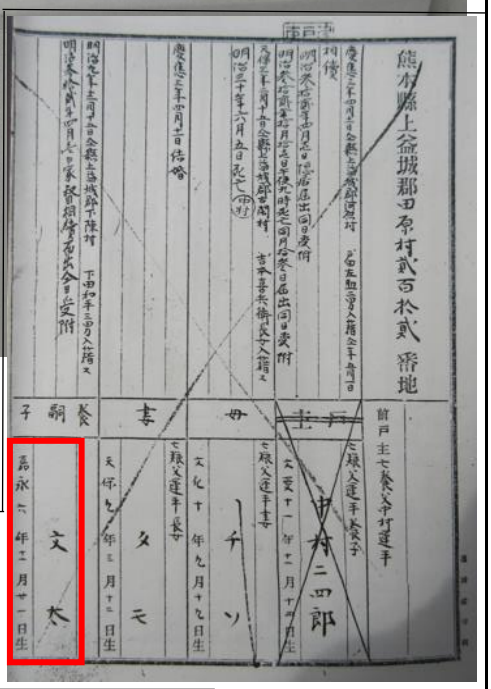
志賀先生は、明治から大正にかけて大交公学校（小学校）の教員心得として、学校を一日も休まず、分けへだてなく住民と生徒に接し、地元民から〝大交聖人〟とまでしたわれた人。死後四十余年のいまも教え子たちは墓参りを欠かさないばかりか、町には教育を尊ぶ気風がみなぎっている。前鎮長、郭金煥氏は教え子で元教員、現鎮長の黄子建氏も元中学教師である。

この日は大交鎮はじめ台湾各地に散らばる教え子、町の教育関係者、それに戦前台湾に渡り現地の人と結婚した元日本女性五人、さらに在留日本人会代表らも参加して、志賀先生の功績をたたえ、感をしのんだ。

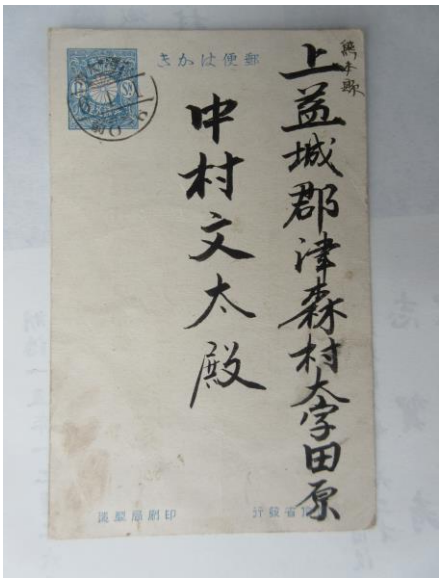
台湾人子弟の教育につくした志賀　哲太郎氏

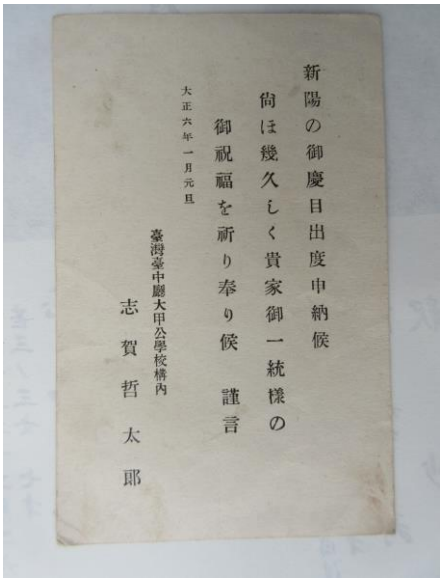
（朝日新聞）とよがが切り抜き保存していたもの。

トヨカの哲太郎回想メモと一緒に保管していた
昭和41年9月26日朝日新聞「生誕百年祭」記事
（中村啓一氏提供）



文太（嘉永6年11月21日生まれ）とトヨカ
（文太の三女明治31年3月25日生まれ）の戸籍
（中村啓一氏提供）





新陽の御慶目出度申納候
尚ほ幾久しく貴家御一統様の
御祝福を祈り奉り候　謹言
大正六年一月元旦
臺灣臺中廳大甲公學校構内
志賀哲太郎

哲太郎直筆の年賀状（大正６年）中村啓一氏提供

3 志賀塾

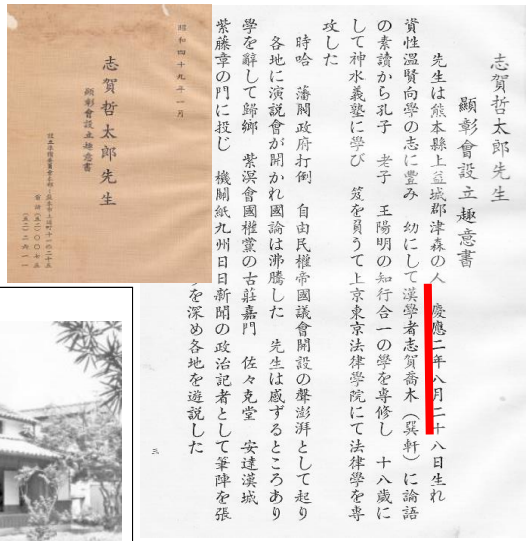
哲太郎は、明治5（1872）年、7歳のとき、津森村木山の志賀塾で読み、書き、そろばんをはじめ、四書五経の手ほどきを受けた。昭和49（1974）年の「志賀哲太郎先生顕彰会趣意書」、島津憲房氏の回想集「台湾への架け橋」、斯文第120号「志賀先生（伊藤賢道）撰文」訳註は、いずれも志賀塾について柳河藩校訓導の志賀喬木（しが たかき・号：巽軒）の塾としているが、塾の所在は確認できない。当時、横井平四郎（小楠）の肥後学を学ぶため、柳河藩から多くの藩士が沼山津の四時軒に来ている。藩士たちは沼山津郷会所が木山にあったことから木山で寝起きし私塾を開きながら肥後学を学び、その後明治になっても実学党政権下で勉学を続けており、志賀喬木もその一人であると考えられる。

喬木は明治7年以降小天（玉名市）の蒙正館の訓導をつとめ、同9年大牟田で銀水義塾を開いて同12年に亡くなっている。哲太郎が学んだのは1～2年間と思われる。

また、神水義塾へ通うまでの約9年間の学歴が分っていない。この間は西南戦争があり益城も戦場となっていたため学校へ通える状況ではなく、戦争後は中村文太の三女トヨカが「少年時代は傳兵衛の書籍箱の本をよく読んでいた」と回想していることから、独学していたものと思われる。

横井平四郎（小楠）

沼山津の四時軒塾跡
（横井小楠記念館提供）

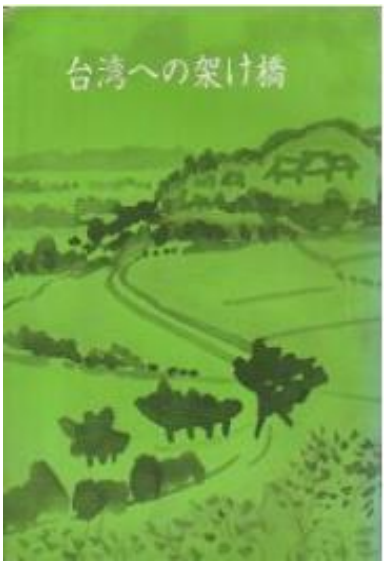


志賀哲太郎先生顕彰会設立趣意書

顕彰會設立趣意書

先生は熊本縣上益城郡津森の人　慶應二年八月二十八日生れ
資性溫賢向學の志に豐み　幼にして漢學者志賀喬木（巽軒）に論語
の素讀から孔子　老子　王陽明の知行合一の學を專修し　十八歳に
して神水義塾に學び　笈を負うて上京東京法律學院にて法律學を專
攻した
時哈　藩閥政府打倒　自由民權帝國議會開設の聲澎湃として起り
各地に演說會が開かれ國論は沸騰した　先生は感ずるところあり
學を辭して歸鄉　紫溟會國權黨の古莊嘉門　佐々克堂　安達漢城
紫藤章の門に投じ　機關紙九州日日新聞の政治記者として筆陣を張
を深め各地を遊說した

志賀哲太郎先生顕彰会設立趣意書
には志賀喬木の塾と記載

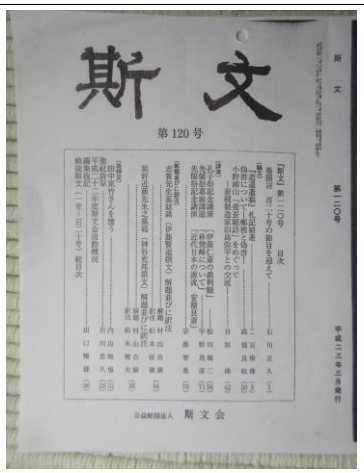


「台湾の架け橋」には
志賀塾と記載

四書

五経

（一）○戸籍名は岩太郎、父甚三郎（銀吉屋）、母寿加、長男。○戸籍上は慶応元年八月二十八日生。○津森村：当時の津森村大字田嶽三三〇番地、現在は町村合併により益城町となる。
（二）○明治五年七歳で津森村木山の志賀塾（志賀喬木、号巽軒、漢学者）で読み書き、そろばん、四書五経の手ほどきを受けた。○津森西方二里の神水義塾で

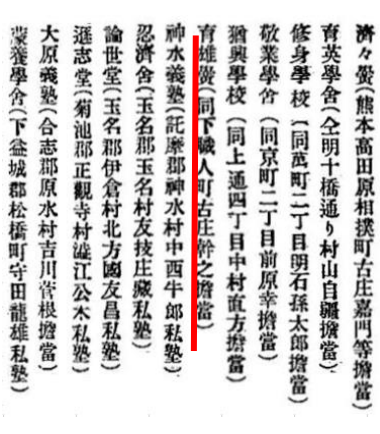


平成22年3月斯文第120号には木山の志賀塾（志賀喬木）と記載

4　神水(しんすい)義塾

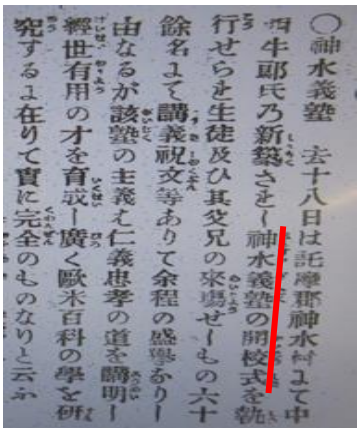
哲太郎は、大甲公学校の履歴書に、明治16(1883)年3月15日から明治19年4月30日まで神水義塾へ通うと記載している。入塾は17歳のときである。田原から約8キロメートル離れた開校したばかりの神水義塾に木山往還を毎日通い続けた。神水義塾は、明治16(1883)年に中西牛郎(なかにし　うしお・号:蘇山)が神水村223番地（現神水本町15番6～8、27号）の若宮神社の境内の一角に開いた私塾で、哲太郎は中西から英語、中西の父惟寛から王陽明の知行合一の説、八淵蟠竜（やつぶちばんりゅう）から仏典、藤岡覚音（がくおん）から宗教を学び、学問の進展を見た。

明治16年2月21日付け紫溟新報に2月18日塾の開校式の記事があるが、塾は「仁義忠孝の道を講明し経世有用の才を育成し広く欧米百科の学を研究するもの」としている。また開校式に「生徒及び其父兄の来場せしもの六十余名にて講義祝分等ありて余程の盛学ぶり」と述べられ、入塾者が多かったことがうかがわれる。現在、神水義塾は私邸となっており、当時の面影を残すものは、熊本市指定の椋木や石垣くらいである。中西は済々黌でも教鞭を執り、政党が起こると「紫溟雑誌」「紫溟新報」の記者となり、のち「東京日日新聞」記者、清国政府官報局、台湾総督府の嘱託として活躍し、哲太郎に影響を与えた。


濟々黌(熊本高田原相撲町古庄嘉門等擔當)
育英學舍(仝明十橋通り村山自疆擔當)
修身學校(同茂町二丁目明石孫太郎擔當)
敬業學舍(同京町二丁目前原幸擔當)
猶興學校(同上通四丁目中村直方擔當)
育雄黌(同下鍛人町古庄幹之擔當)
神水義塾(託麻郡神水村中西牛郎私塾)
忍濟舍(玉名郡玉名村友技庄藏私塾)
論世堂(玉名郡伊倉村北方國友昌私塾)
遜志堂(菊池郡正觀寺村澁江公木私塾)
大原義塾(合志郡原水村吉川菅根擔當)
濠養學舍(下益城郡松橋町守田龍雄私塾)

明治16年の県下の塾(紫溟新報)

神水義塾跡　H28.2撮影


○神水義塾　去十八日は託麻郡神水村ユて中西牛郎氏乃新築さゝ神水義塾の開校式を執行せらゝ生徒及ひ其父兄の來場せしもの六十餘名ユて講義祝文等ありて余程の盛學ぶりー由なるが該塾の主義ゝ仁義忠孝の道を講明ー經世有用の才を育成ー廣く歐米百科の學を研究するユ在りて實に完全のものなりと云ふ

明治16年2月21日　紫溟新報

塾生
志賀哲太郎
当時17歳

塾長（英語担当）
中西牛郎
当時24歳

明治36（1903）年	淡水税関税関長房	嘱託
明治39（1906）年	淡水税関庶務課	嘱託
明治40（1907）年	財務局	嘱託
明治41（1908）年	糖業試験場台北分室	嘱託
明治42（1909）年	財務局庶務課	嘱託

中西牛郎の台湾総督府における経歴
（台湾総督府職員録引用）

紫　溟　会

濟　々　黌
講師

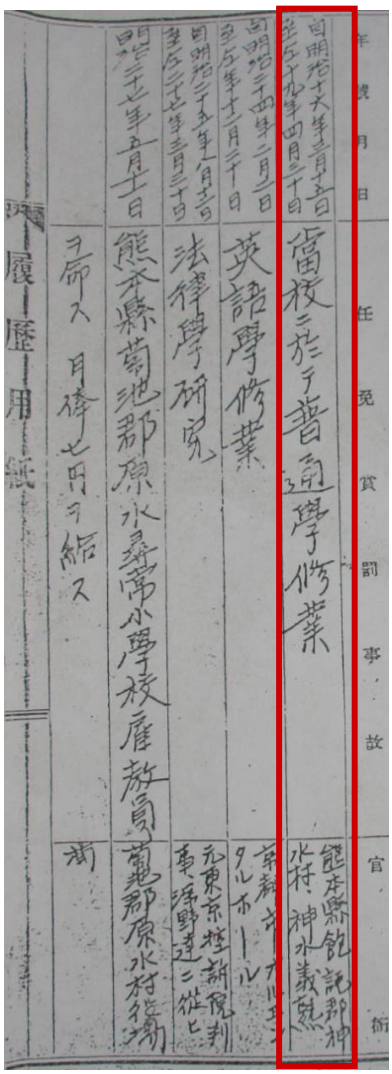
紫 溟 新 報
記者

本願寺派僧侶
（宗教学担当）
藤岡覚音
当時60歳

本願寺派東福寺僧侶
（仏典担当）
八淵蟠龍
当時35歳

知行合一を説いた王陽明の傳習録

仏典教本



大甲公学校の履歴用紙
（大甲区公所提供）

塾跡に残る若宮神社所有の標石
H28.5撮影

塾跡に残る熊本市指定の椋木
H28.5撮影

5　明治法律学校

哲太郎は、明治20（1887）年2月、21歳の時、中西の勧めで上京し、 神田南甲賀町（現千代田区神田駿河台１丁目）の明治法律学校（現明治大学）に進学する。同校は自由民権運動の影響を受け、授業料が安く、しかも熊本の苦学生を受け入れる「有斐学校」（本郷区西片町：現文京区西片1丁目）に近かった。寄宿舎有斐学校は明治14年古荘嘉門らが創設した紫溟学舎を改称したもので明治21年には現在の有斐学舎となった。当時の有斐学校の校長は井上毅(いのうえこわし）である。

明治法律学校は有斐学校の南南東約1.5キロに位置し、校長は創設者の岸本辰雄で、教師は国際法ボアソナード、民法大木喬任（おおき たかとう）、刑法鶴田皓、商法箕作麟祥らであった。哲太郎は、家からの仕送りも乏しく、食費を削って法律書を購入し勉強していたという。しかし、同22(1889)年12月、父甚三郎が亡くなったため、志半ばにして学業を断念し帰郷した。平成27年に遺族の澤田寛旨氏が明治大学に対して哲太郎の在学期間の照会を行ったが、中退者については記録が残っていない旨の回答であった。

明治法律学校長
岸本辰雄
当時32歳

国際法教師
ボアソナード
当時62歳

民法教師
大木喬任
当時55歳

刑法教師
鶴田皓
当時51歳

商法教師
箕作麟祥
当時41歳

学生
志賀哲太郎
当時21歳

明治法律学校と有斐学校の位置関係

神田南甲賀町の明治法律学校校舎
（明治２０年代）

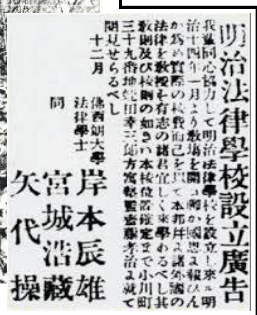
紫溟学舎創設
古荘嘉門
当時47歳

有斐学校長
井上毅
当時39歳

明治14年	紫溟学舎
明治15年	有斐学舎
明治16年	有斐学校
明治21年	有斐学舎
現在に至る	

有斐学舎の記録

運動会（「明治大学小史」引用）



明治法律學校設立廣告

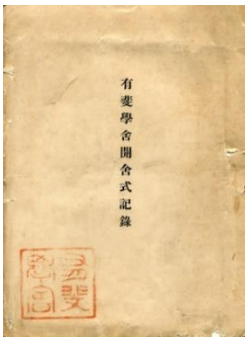
我邦同心協力して明治法律學校を設立し來る明治四年一月より教場を開き以來十有餘年の間國恩を報ひんが爲め實際の校費を自己に出して本邦并に諸外國の法律を教授し有志の諸君宜しく來學わるべし其教則及び教授の如きは本校位置確定まで小川町三十九番地に於て之を公示せんとす

明治十二月

法律學士　岸本辰雄
同　佛蘭西大學　矢宮城沿代操藏

設立広告

明治十九年　井上毅氏が校長に。この年に皇太子殿下の御来観を得た。
明治二十年　校長に高橋氏、幹事に志水元吾、池邊吉太郎両氏。
明治二十一年　学校組織を改め、単に肥後学生の寄宿舎として名前も有斐学舎とした。幹事に亀井英三郎、斎藤貞安両氏。
明治二十二年　小石川の上富坂に移転。



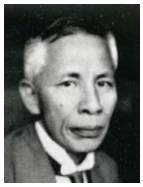
６ 新聞記者

哲太郎は25歳の時、有斐学舎の舎長高橋長秋（熊本国権党員）の紹介で紫溟学会（明治14年創設の紫溟会は同17年に紫溟学会へ改称）に入会し、熊本国権党の機関紙「九州日日新聞（明治21年創設：前身紫溟新報）」の記者として採用された。遺産相続が明治23(1890)年3月18日であるので、採用はその頃と思われる。入社当時の社長は浅山知定である。哲太郎は漢籍の素養が深く作文も得意であったので、記者として重宝がられた。熊本国権党は国権拡張を運動目標としており、大日本帝国憲法が発布（明治22年2月11日）され、国会が召集（明治23年11月29日）されてからは、古荘嘉門、佐々友房、紫藤寛治などの諸名士と東京と熊本を往来し、政客との交わりを深め、各地の政情を調査して記事にした。哲太郎の東奔西走の状況は、同党員で海軍嘱託諜報員であった宗方小太郎の日記に記されており、東京や京都で活動していたことがうかがえる。この頃、安達謙蔵、紫藤章や宮崎滔天（とうてん）らとの交流が生まれている。

また、哲太郎は、宗方日記では大正2年4月に哲太郎が台湾から書簡を出しているが、これは大甲一帯で発生していた大甲事件と呼ばれる抗日事件で、学校の安全を確保するため抗日運動家に精通した宗方へ相談したものと推測する。

古荘嘉門
国権党総理
衆議院議員
当時50歳

佐々友房
国権党副総理
衆議院議員
当時46歳

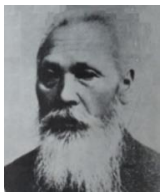


安達謙三
記者
国権党員
当時26歳

宗方小太郎
国権党員
海軍諜報員
当時26歳

新聞名

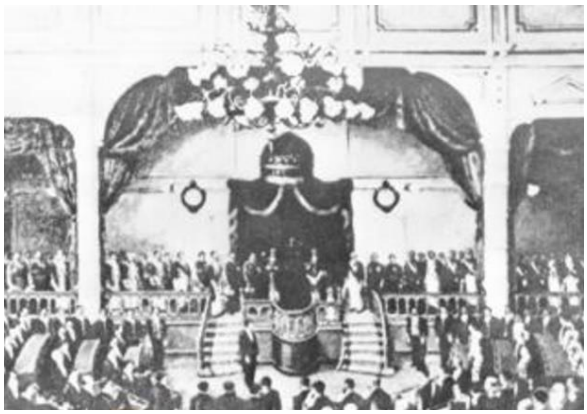
紫藤　章
国権党員
農学博士
当時31歳



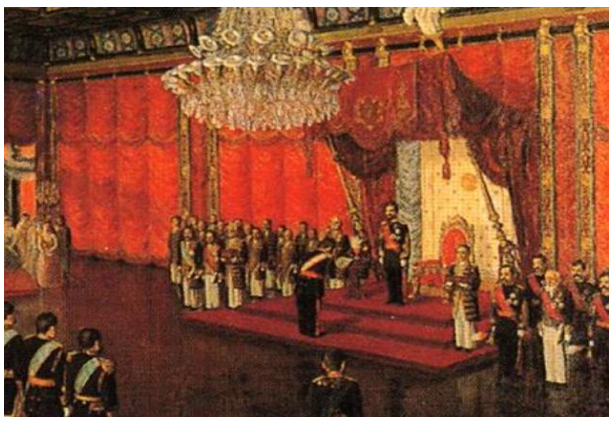
紫藤寛治
無所属
衆議院議員
当時58歳

宮崎滔天
熊本民権党員
革命家
当時29歳

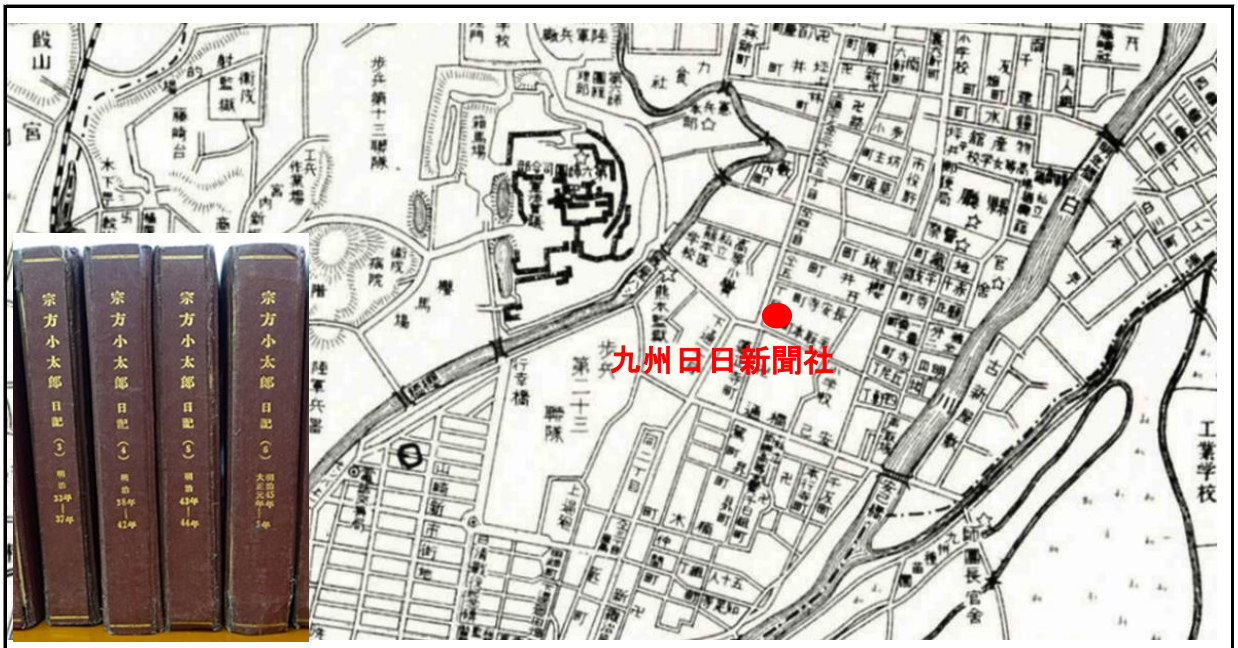
志賀哲太郎
国権党員
新聞記者
当時25歳



第1回帝国議会開院　（写真図解明治天皇引用）



大日本帝国憲法発布（写真図解明治天皇引用）



宗方小太郎日記　　明治30年頃熊本市街地図

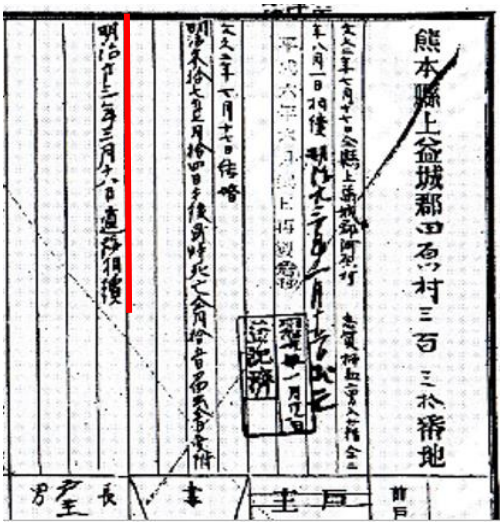
哲太郎、東京・京都に出現

宗方小太郎日記」から

明治26年5月東京の宗方を訪問

五月初三日

雨天。朝佐藤帰る。志賀哲太郎来談。西京井手三郎に復信す。上海白岩龍平の信至る。白岩は研究所の困難を救ふ為め市川徹弥と共に大坂に帰る筈なりと云ふ。又た熊本緒方二三、前田彪より来信。夜緒方、山田に発信、東京運動の概略を報ず。



遺産相続日付　明治23年3月18日
戸籍簿（澤田寛旨氏提供）

明治26年6月京都から東京の宗方へ書簡

六月十日　雨天。天津仲正一（陸軍大尉小沢徳平也）、芝罘白須直に寄するの書を作り、中西正樹の天津行に托す。午前出て河野を訪ひ、晌午帰る。別府氏留守中に来訪せりと云ふ。下午河野と古城貞吉を訪ひ、三時帰る。夜鳥居来談。是日家大人の書及び菅婦人、京都志賀哲太郎の書到る。

大正2年4月熊本の宗方へ書簡

四月四日　快晴。志賀哲太郎、波多博の信に接す。午前理髪，午後内人と水前寺に游び、桜を観、茶を 吃して帰る。緒方、阿部野来訪せりと云ふ。午後大江を訪ひ、夜河口宅に至る。

四月八日　微雨。朝生田清範来訪。吉田大佐に復電す。田中清司来訪。阿多廣介の信至る。之に復す。台湾志賀哲太郎に復書す。午後内人と大江を訪ふ。奉天中島為喜の電報至る。夜古閑信夫夫婦来訪。

7　教育勅語発布

明治23(1890)年10月、25歳の時、井上毅内閣法制局長官（元有斐学校校長）と儒学者の元田永孚（もとだ ながざね）氏の両名が起草し、明治天皇によって「教育ニ関スル勅語」が発布された。教育勅語は四書五経・陽明学を学んだ哲太郎の思いに通じるもので教育者の道に進む転機となった。

教育勅語は修身・道徳教育の規範で「台湾教育令」（明治28年5月発令）の基本となり、哲太郎は台湾大甲へ行ってから徳育に重点をおいた教育を実践している。

教育勅語発布直後に記者をしながら英語や法学の勉強を始める。大甲公学校の履歴書には明治24（1891）年2月2日から同年12月20日まで「京都市オリエンタルホール」で英語を学んだと記述されている。この塾は平井金三が京都烏丸通に開いた英語塾である。また、明治25（1892）年8月12日から明治27（1894）年3月30日まで元東京控訴院判事深野達のもとで法律学を研究している。深野は「日本民事訴訟法釈説」を書いた法学者である。

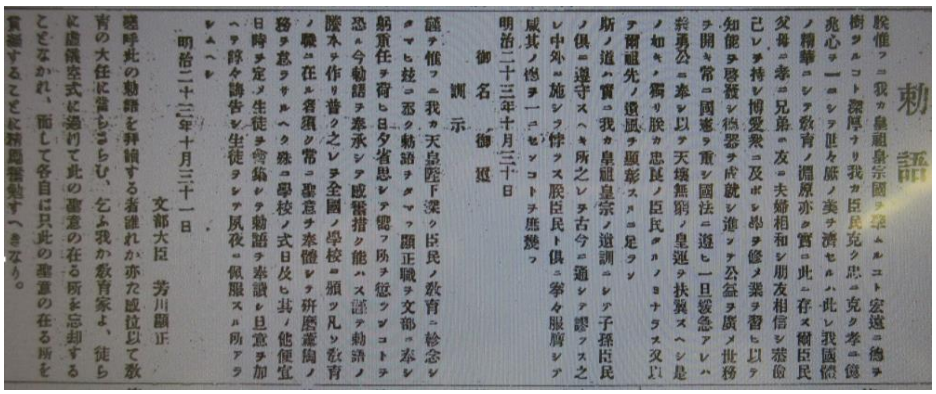
明治天皇
当時37歳

教育二関スル勅語　明治23年10月30日発布
（日本文化興隆財団引用）

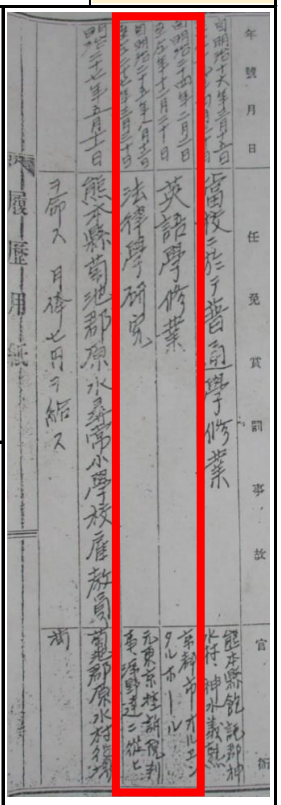
内閣法制局長官
井上 毅
（熊本県）
当時45歳

儒学者
元田永孚
（熊本県）
当時72歳

記者・国権党員
志賀哲太郎
（熊本県）
当時25歳



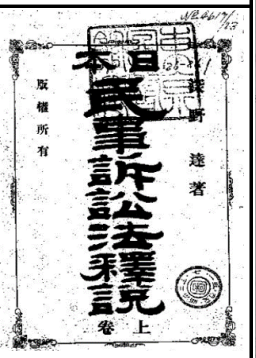
教育勅語発布の記事（明治23年11月6日付熊本新聞引用）



大甲公学校の履歴書
（大甲区公所提供）

英学塾
京都オリエンタル
ホール開塾者
平井金三
当時32歳

東京控訴院
（東京控訴院裁判録引用）



深野達 著
「民事訴訟法釈説」

8　記者辞職

哲太郎が九州日日新聞（現熊本日日新聞）の記者時代に政府による選挙干渉や古荘嘉門、佐々友房らの国権党と山田武甫(やまだ たけとし）、松山守善（まつやまもりよし）らの自由党との間の政争で死傷者を出す事件が多発した。特に激しかった明治24（1891）年から同25年にかけては、松方内閣の政府と議会が予算案をめぐって真っ向から対立し、松方は同24年12月25日に衆議院を解散し、品川内務大臣は全国の知事に第2回衆議院議員選挙への干渉を指示した。熊本県では松平知事が選挙干渉の訓諭を行い、これを受けて安楽警察部長が警察官を指揮し苛烈な選挙干渉を行った。哲太郎は、当時の日本政界が国民の福祉を無視し、党利党略私利私欲に走り国民のために尽くさないのに深く失望し、「国家の根本は教育にあり」と悟って明治27(1894)年に国権党を離党し、記者を辞めた。哲太郎の九州日日新聞での在職期間については、昭和40年代に遺族の澤田寛旨氏が熊本日日新聞社（論説委員長平野敏也氏）に調査を依頼したが、記録は残っておらず判明しなかった。

総理
松方正義（薩摩）
当時56歳

内務大臣
品川弥二郎（長州）
当時48歳

熊本県知事
松平正直（越前）
当時47歳

熊本県警察部長
安楽兼道（薩摩）
当時40歳

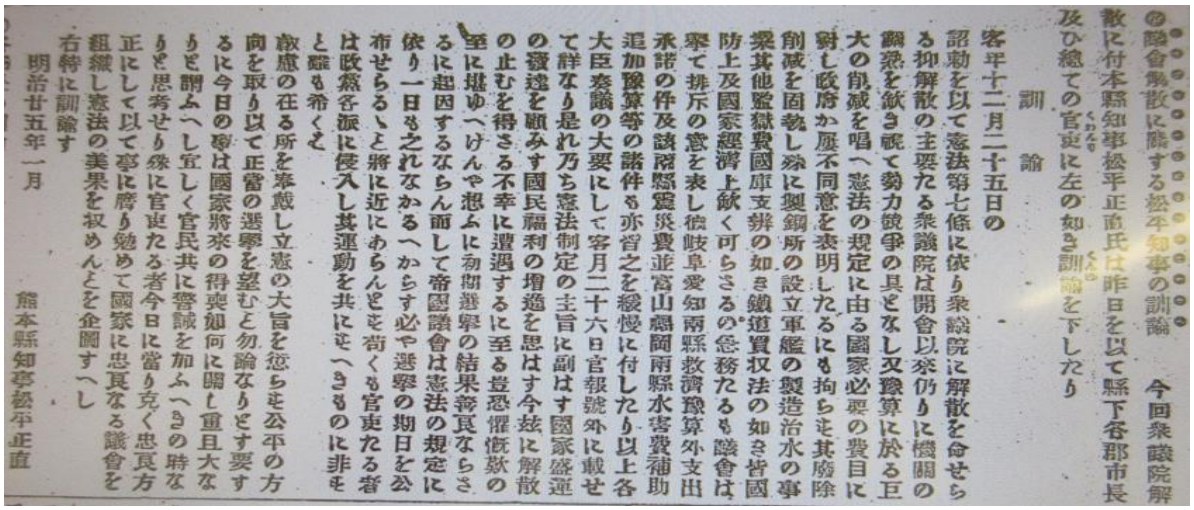
国権党
古荘嘉門
当時51歳

国権党
佐々友房
当時37歳

国権党　記者
志賀哲太郎
当時26～28歳

自由党
山田武甫
当時59歳

自由党
松山守善
当時42歳



今回衆議院解散に付本縣知事松平正直氏は昨日を以て縣下各郡市長及び總ての官吏に左の如き訓諭を下したり

訓諭

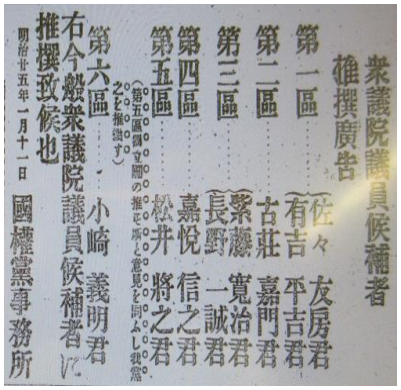
客年十二月二十五日の詔勅を以て憲法第七條に依り衆議院に解散を命せらる抑解散の主要たる衆議院は開會以來仍りに機關の齟齬を欲き眞に勢力競爭の具となし又豫算に於る巨大の削減を唱へ憲法の規定に由る國家必要の費目に對し政府か屢不同意を表明したるにも拘らず其廢除削減を固執し殊に製鋼所の設立軍艦の製造治水の事業其他監獄費國庫支辨の如き鐵道買収法の如き皆國防上及國家經濟上欲く可らざるの急務たるも議會は擯て排斥の意を表し徳岐阜愛知兩縣救濟豫算外支出承諾の件及請願罹災費並富山福岡兩縣水害費補助追加豫算等の諸件も亦皆之を緩慢に付したり以上各大臣奏議の大要にして客月二十六日官報號外に載せて詳なり是れ乃ち憲法制定の主旨に副はず國家盛運の發達を顧みず國民福利の増進を思はず今茲に解散の止むを得ざる不幸に遭遇するに至る豈恐懼慨歎の至に堪ゆべけんや想ふに初期選擧の結果等閑ならざるに起因するなら而して帝國議會は憲法の規定に依り一日も之れなかるへからず必や選擧の期日を公布せらるゝと將に近にあらんとを苟くも官吏たる者は政黨各派に侵入し其運動を共にせへきものに非ずと雖も希くは

叡慮の在る所を奉戴し立憲の大旨を愆らず公平の方向を取り以て正當の選擧を望むと勿論なりとす要するに今日の事は國家將來の得喪如何に關し重且大なりと謂ふへし宜しく官民共に警誡を加ふへきの時なりと思考せり殊に官吏たる者今日に當り克く忠良方正にして以て事に將り勉めて國家に忠良なる議會を組織し憲法の美果を収めんとを企圖すへし

右特に訓諭す

明治廿五年一月　熊本縣知事松平正直

松平知事の選挙干渉訓諭の記事（明治25年1月5日　九州日日新聞引用）



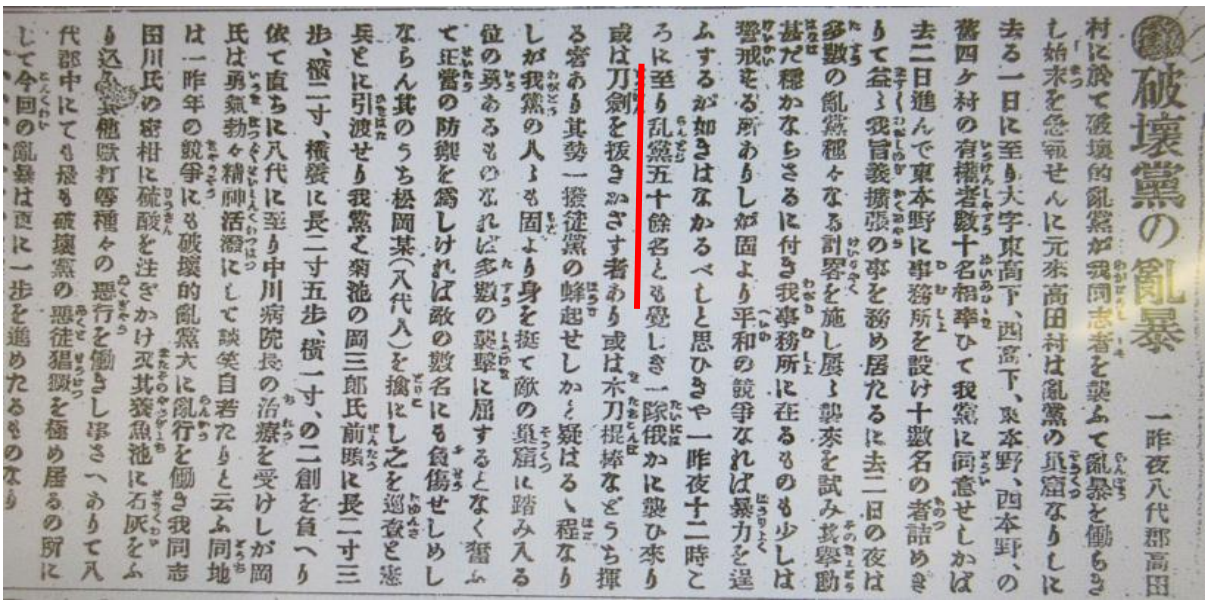
衆議院議員候補者
推撰廣告

第一區……佐々友房君
第二區……（有吉）古荘 平吉君 嘉門君
第三區……（衆藤）長野 寛治君 一誠君
第四區……嘉悦 信之君
第五區……松井 將之君
（第五區の諸立候補の推撰廣告と意見を同ふし我黨之に推薦す）
第六區……小崎 義明君
右今般衆議院議員候補者に推撰致候也
明治廿五年一月十一日 國權黨事務所

第２回衆議院議員選挙
熊本候補者記事
（明治25年1月13日　九州日日新聞）

年　月　日	事　件　名
明治23年2月	山鹿で両党員による刺殺乱闘事件
明治24年12月	松方内閣衆議院解散
明治25年1月	品川内務大臣選挙干渉指示
明治25年2月　3日	八代で改進党による国権党員襲撃事件
明治25年2月　4日	鏡村で改進党による国権党員襲撃事件
明治25年2月15日	第2回衆議院総選挙
明治25年2月29日	嶽間村で国権党・警察による 自由党員土蔵監禁事件（選挙干渉）

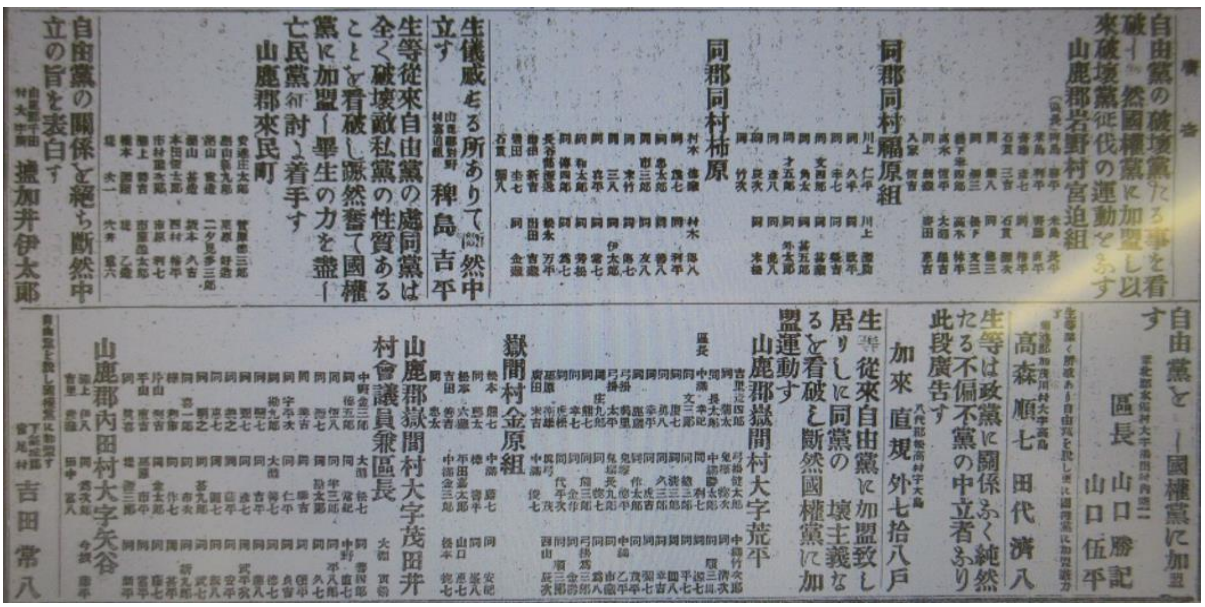
国権党・自由党（改進党）の主な衝突事件
（熊本県警察史引用）



破壞黨の亂暴

一昨夜八代郡高田村に於て破壞的亂黨が我同志者を襲ふて亂暴を働もきし始末を急報せんに元來高田村は亂黨の巣窟なりしに去る一日に至り大字東高下、西高下、東本野、西本野、の舊四ケ村の有權者數十名相率ひて我黨に同意せしかば去二日進んで東本野に事務所を設け十數名の者詰めきりて益〻我旨義擴張の事を務め居たるに去二日の夜は多數の亂黨穏々なる割拇を施し屢〻襲來を試み其擧動甚だ穏かならさるに付き我事務所に在るものも少しは警戒を為ある所ありしが固より平和の競爭なれば暴力を逞ふするが如きはなかるべしと思ひきや一昨夜十二時ころに至り亂黨五十餘名とも覺しき一隊俄かに襲ひ來り或は刀劍を振きかざす者あり或は木刀棍棒などうち揮る者あり其勢一撥徒黨の蜂起せしかと疑はるゝ程なりしが我黨の人〻も固より身を挺て敵の巣窟に踏み入る位の勇あるものなれば多數の襲擊に屈するとなく奮ふて正當の防禦を爲しければ敵の數名にも負傷せしめしならん其のうち松岡某（八代人）を擒にし之を巡査と憲兵とに引渡せり我黨之菊池の岡三郎氏前膊に長二寸三歩、横二寸、横發に長二寸五歩、横一寸、の二創を負へり依て直ちに八代に至り中川病院長の治療を受けしが岡氏は勇氣勃々精神活潑にして談笑自若たりと云ふ同地氏は一昨年の競爭にも破壞的亂黨大に亂行を働き我同志田川氏の家柑に硫酸を注ぎかけ又其養魚池に石灰をふり込み其他獸打等種々の惡行を働きし事さへありて八代郡中にても最も破壞黨の惡徒猖獗を極め居るの所にして今回の亂暴は更に一歩を進めたるものなり

2月3日改進党による国権党員襲撃事件記事（明治25年2月5日　九州日日新聞引用）



廣告

自由黨の破壞黨たる事を看破し然國權黨に加盟し以來破壞黨征伐の運動をあす
山鹿郡岩野村宮迫組
同郡同村柿原
同郡同村福原組
同郡同村稗島 吉平
生儀戚る所ありて斷然中立す
生等從來自由黨の處同黨は全く破壞敵私黨の性質あることを看破し斷然奮て國權黨に加盟し一生の力を盡し亡民黨和討し着手す
山鹿郡來民町
自由黨の關係と絶ち斷然中立の旨を表白す
加藤井伊太郎
山鹿郡嶽間村大字荒平
生等從來自由黨に加盟致し居りしに同黨の壞主義なるを看破し斷然國權黨に加盟運動す
山鹿郡嶽間村大字茂田井
村會議員兼區長
高森順七　田代清八
生等は政黨に關係ふく純然たる不偏不黨の中立者あり此段廣告す
加來直規　外七拾八戸
嶽間村金原組
自由黨と——國權黨に加盟す
區長　山口勝記
山口伍平
山鹿郡内田村大字矢谷
吉田常八

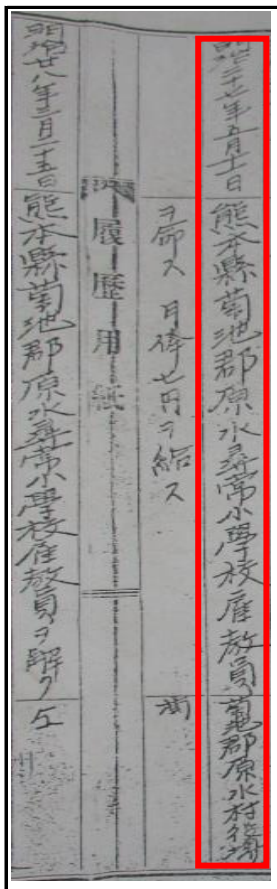
選挙情勢記事（明治25年2月1日　九州日日新聞引用）

9　原水小学校で教師

大甲公学校の履歴書によると、哲太郎は明治27(1894)年5月11日から明治28年3月25日まで菊池郡の原水尋常小学校で代用教員として教鞭を執っている（月給7円）。記者時代の同志紫藤章（当時34歳：農学博士）の紹介で同校の教員となったと思われる。同校は紫藤章の伯父吉川原南と父紫藤寛治が創設した学校で、郷土誌「合志の南方(みなみかた）」（佐藤芳男）によれば明治6年の学制発布により桂陰学舎として始まり、同7年に原水小学校と改称し紫藤寛治宅敷地内（現在の南方公園）に校舎が新築された。その後火災などで移転を繰り返し、哲太郎が勤務した同27年は柳南橋の北側に移転している。柳南橋の下のＪＲ豊肥線沿いには創立百周年「原水小学校の跡」の石碑が建てられている。

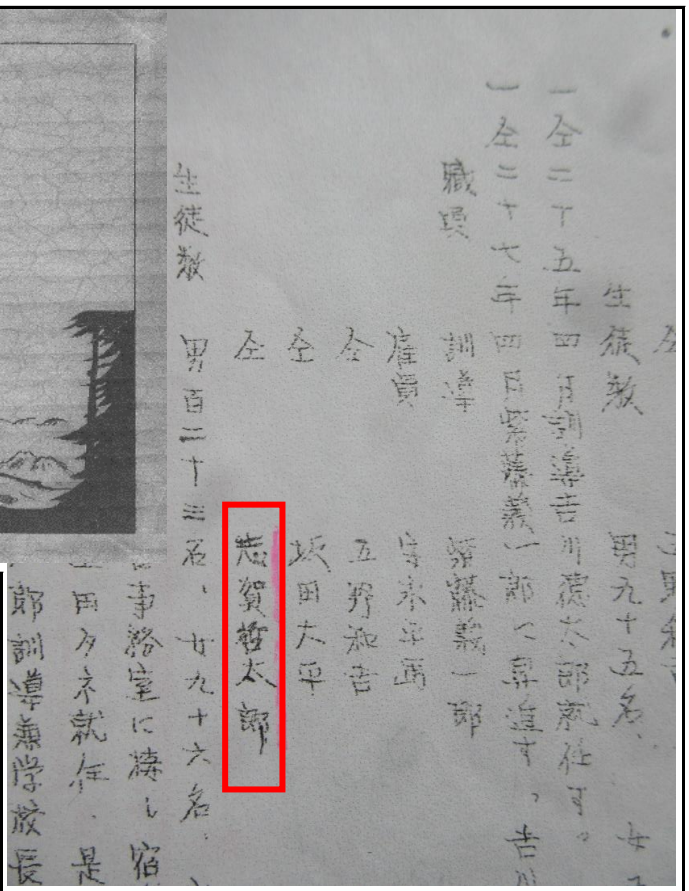
また、「原水村郷土誌」（佐藤芳男）には同校の教職員名が掲載されており「明治二十七年四月職員生徒数左の如し、職員　訓導紫藤義一郎、雇員安永平馬、同五野和吉、同坂田大平、同志賀哲太郎　生徒数　男百二十三名、女九十六名、計二百十九名」とあり、哲太郎が雇員の教師として1年間在職した記載がある。

同校の教育内容は明治23年の「第二次小学校令」で示された道徳教育・国民教育・知識技能教育の三つであった。明治時代は欧米列強に並ぶ強国の建設を第一に実現しなければならないとする明治政府の基本理念があった。政府は国家を個人に優先させる国家主義を進め、政府主導のもと尊皇愛国の志気を発揚し、実業を励み素行を修め忠良の臣民とすることに小学校教育の目的が置かれた。このような政府主導の型にはめた教育が哲太郎の意に沿わず、また他の先生とも学問的な問題もあって同校を辞職した。

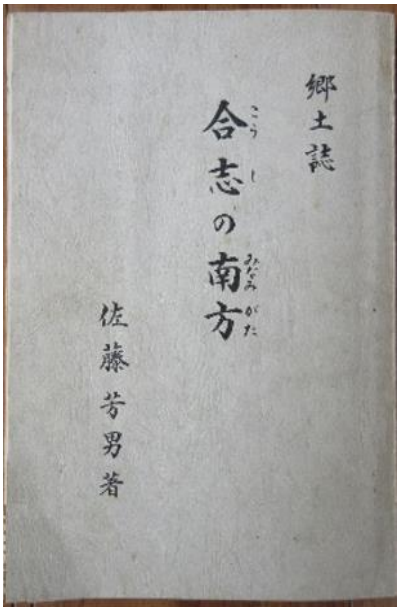


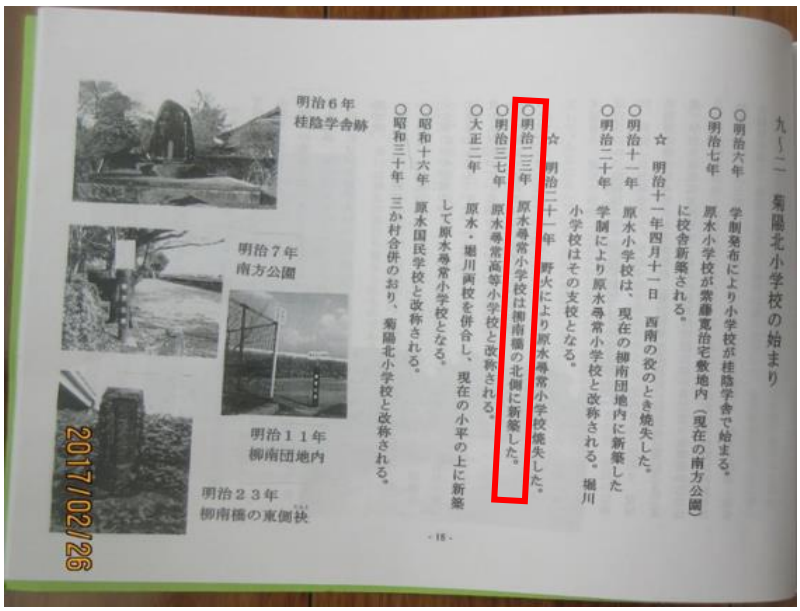
大甲公学校履歴書
（大甲区公所提供）

原水尋常小学校
雇教員
志賀哲太郎
当時28歳

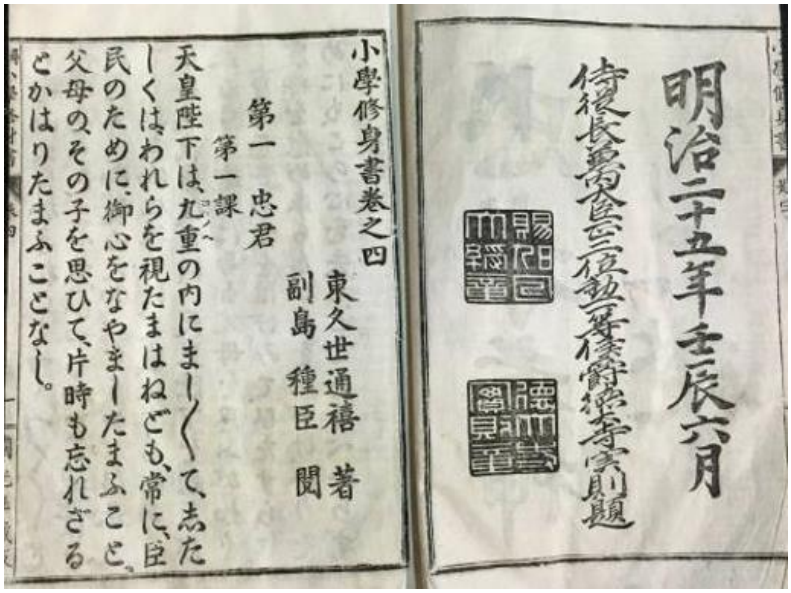


哲太郎の名前が掲載された郷土誌「合志の南方」
（菊陽町提供）





原水尋常小学校跡を掲載した「郷土誌「合志の南方」（紫藤英二氏提供）



明治25年の尋常小学校修身教本（国立国会図書館デジタルコレクション引用）

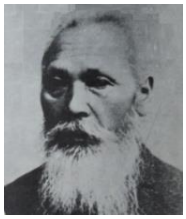
原水小学校跡の碑 H29.2撮影

10 大原義塾で教師

明治28（1895）年4月、29歳の時、哲太郎は勧められるまま原水尋常小学校から南東約500メートル離れた大原義塾（現在の南方公園）に塾頭として勤務することになった。同塾は原水小学校同様、吉川原南と紫藤寛治が明治14年に小学校卒業の生徒を対象に開いた塾で、教育内容は「実業を貴び農桑（農業・養蚕）を勧むる」を教育方針とした実業学校であった。しかし、この塾は塾生が少なく経営が思わしくないことから哲太郎は将来について悩んだ。在職中に日清戦争で台湾が割譲されることになり、植民地教育に関する情報が次々と入って来た。哲太郎は台湾子弟の教育に自分の思いを託そうと考え、同塾を翌29年3月に辞職した。

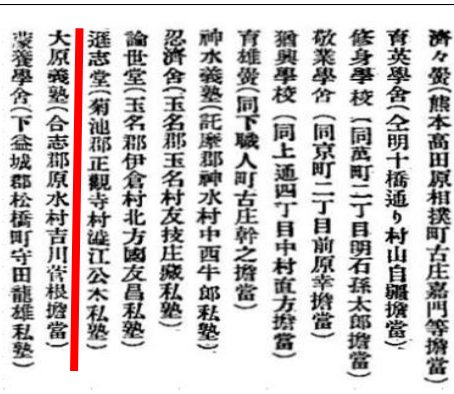
原水の大原義塾跡には安達謙蔵が書いた紫藤寛治の顕彰碑があり、副碑には寛治の盟友佐々友房がベルリンで訃報に接して送った和歌が刻まれている。

大甲公学校の履歴書には大原義塾の記載はなく、菊陽町関係の資料でも哲太郎の勤務の事実は得られなかった。明治16年の紫溟新報の記事で大原義塾（塾長吉川菅根）の記載がある。



大原義塾
開塾者
紫藤寛治
開塾時49歳

大原義塾
塾頭
志賀哲太郎
当時29歳



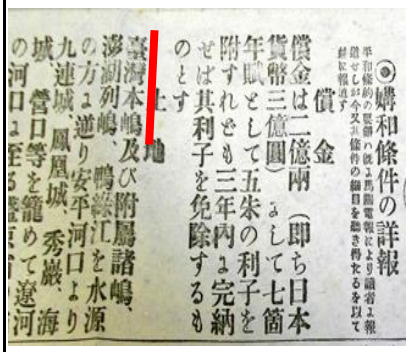
濟々黌（熊本高田原相撲町古庄嘉門等擔當）
育英學舍（仝明十橋通り村山自轟擔當）
修身學校（同芭町二丁目明石孫太郎擔當）
敬業學舍（同京町二丁目前原幸擔當）
猶興學校（同上通四丁目中村直方擔當）
育雄黌（同下職人町古庄幹之擔當）
神水義塾（託麻郡神水村中西牛郎私塾）
忍濟舍（玉名郡玉名村友技庄藏私塾）
論世堂（玉名郡伊倉村北方國友昌私塾）
遥志堂（菊池郡正觀寺村澁江公木私塾）
大原義塾（合志郡原水村吉川菅根擔當）
蘐養學舍（下益城郡松橋町守田龍雄私塾）

明治16年の県下の塾（紫溟新報引用）

大原義塾跡と紫藤寛治翁頌徳記念碑
H29.2撮影

紫藤寛治の訃報を
聞き和歌を贈った
佐々友房
当時43歳

吉川原南先生顕彰記念碑略記 H29.2撮影



◎媾和條件の詳報

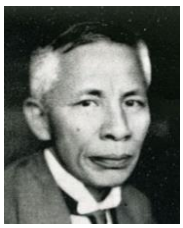
平和條約の要綱の既報馬關電報により讀者よ報道せし所今又其條件の細目を聞き得たるを以て茲に報道す

償金（即ち日本貨幣三億圓）として七箇年賦として五朱の利子を附すれども三年内に完納せば其利子を免除するものとす

土地

臺灣本嶋及び附屬諸嶋、澎湖列嶋、鴨綠江を水源の方に遡り安平河口より九連城、鳳凰城、秀巖、海城、營口等を籠めて遼河の河口に至る

下関講和条約の台湾割譲記事

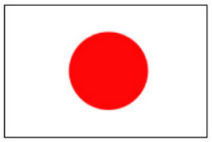


紫藤寛治顕彰碑の
碑文を書いた
安達謙蔵
当時33歳

11　台湾民主国

明治28(1895)年日清戦争の結果、下関の春帆楼で日清講和条約（日本側：伊藤博文全権、清朝側：李鴻章全権）が結ばれ、清朝は“化外の地”台湾を日本に割譲した。台湾の住民は清朝の行為に激怒し、教育家丘逢甲は「台湾は我々台湾人のものである。他人が勝手に授受することは任すわけにはいかない。清朝が我々を棄てても我々は何で自ら自分を棄てることができようか」と全島の同胞に呼びかけ、明治28年5月16日、抗日戦に踏み切った。同月25日、巡撫衙門に参上して唐景崧を大総統に推挙し「台湾民主国之章」を授けた。藍地黄虎の旗を国旗とし台湾民主国を宣言。そして台南の名将劉永福も民主国に参加した。唐景崧は陳季同を外務大臣、兪明震を内務大臣、李秉瑞を軍部大臣に任命し、台北に議会を設立した。英国への援助要求、露仏独三カ国の台湾割譲阻止を要求するように願ったがいずれも失敗に終わった。民主国軍は、「台湾の軍隊は未だ４万人、何で易々と敵に頭を下げることがあろう、武力をもって構えるなら台湾人もこれに敵対するだけである」として日本軍の来襲に備え、基隆、淡水、台北、桃園、新竹、台中、台南の守備を固めた。

台湾総督に任命された樺山資紀は、北白川宮の近衛師団と合流し、占領体制を整え、同月28日基隆港沖に到着、6月2日独艦で来航した清国政府全権委員李経芳らと会同し、横浜丸の船中で台湾割譲の授受儀式を完了した。



大日本帝国
全権
伊藤博文
当時53歳

明治28年4月17日の日清講和条約 画
（日清戦争の時代引用）

大清帝国
全権
李鴻章
当時72歳

台北巡撫衙門（台北写真帖引用）

講和条約が行われた下関の春帆楼
（日清戦争の時代引用）

台湾民主國軍絵、中央が丘逢甲大将（台湾民主國の研究引用）

民主国国旗（國立臺灣博物館資料引用）

民主国軍の陣地構築箇所

抗戦論者
丘逢甲　当時30歳

民主国総統
唐景崧　当時54歳

外務大臣
陳季同　当時44歳

名将
劉永福　当時58歳

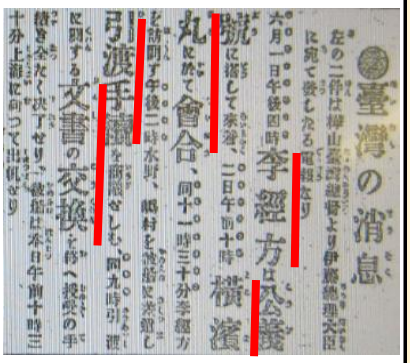
内務大臣
兪明震　当時35歳

議院議長
林維源　当時55歳

清国全権委員
李経芳(李経方)
当時40歳

台湾総督
樺山資紀
当時57歳

陸軍中将
北白川宮能久親王
当時48歳



臺灣の消息

左の二件は樺山臺灣總督より伊藤總理大臣に宛て發したる電報左り

六月一日午後四時李經方は公議

就に諾して來會、二日午前十時橫濱

丸に於て會合、同十一時三十分李經方

を訪ひ午後二時水野、鳴村を後館に送館し

弓渡手續を商議せし、而九時引渡

に關する文書の交換を終へ授受の事

總督全たく決了せり、後館は本日午前十時三

十分上海に向つて出帆せり

明治28年6月15日　九州日日新聞

志賀哲太郎
当時29歳

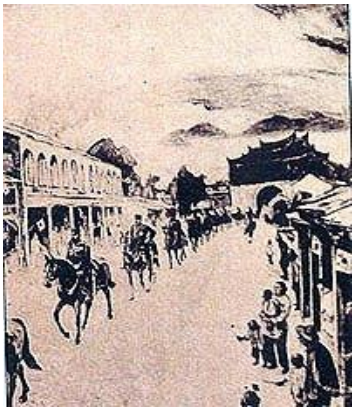
12　台湾平定

明治28年5月29日、日本軍は東北海岸澳底から上陸、そして6月3日基隆の守備隊を猛攻し敗走させた。民主国軍は戦わずして四散、台北の守備隊も動揺して逃避した。日本軍は同月11日には台北城に入城した。

台北は日本軍の手に落ちたが、新竹以南は民主国の勢力下にあった。民主国軍は抗日を呼びかけ、各地に義民の組織を持つようになった。日本軍は南下を開始、これら義民軍の猛反撃に遭って苦戦を強いられ、予想よりかなり遅れて6月23日苗栗、8月23日やっと大甲を陥落させた。大甲攻撃が苦戦した原因は大甲の地形が天然の要塞の如く守るに易く攻めるに難しかったからである。日本軍は8月28日には犠牲を多数出しながら彰化に入った。北白川宮の近衛師団は乃木希典の第二師団と伏見宮親王の混成旅団の来援を得て南下を開始、陸軍の攻撃に呼応して海軍の艦砲射撃による猛攻で10月22日に台南に入城、劉永福は厦門へ逃亡し民主国軍は崩壊した。

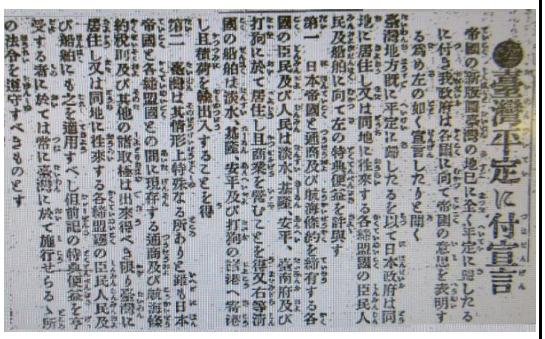
総督府は、11月18日、台湾平定宣言を行った。しかし、土匪の抵抗は絶えることがなかった。全島各地の支庁、派出所・駐在所が土匪からの襲撃を受け、明治31年から5年間に殺害した土匪は10,950人で、うち匪徒刑罰令で死刑に処せられた者は2,998人に及んでいる。

基隆攻略の日本軍　錦絵



台北城無血入城の日本軍 画

澳底で露営する近衛師団長の能久親王一行
（「日清戦争の時代」引用）



臺灣平定ニ付宣言

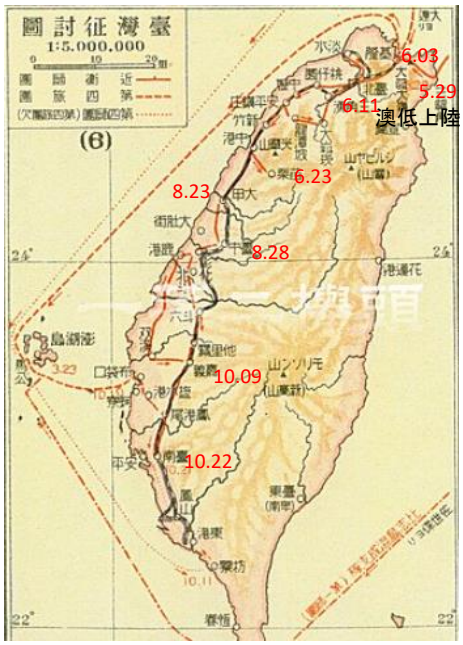
帝國の新版圖臺灣の地已に全く平定に歸したるに付き我政府は各國に向て帝國の意思を表明する爲め左の如く宣言したりと聞く

臺灣地方既に平定に歸したるを以て日本政府は同地に居住し又は同地に往來する各締盟國の臣民人民及船に向て左の特典優益を許與す

第一　日本帝國と通商及び航海條約を締有する各國の臣民及び人民は淡水、基隆、安平、臺南及び打狗に於て居住し且商業を營むことを得又右等諸國の船は淡水、基隆、安平及び打狗の諸港に碇泊し且積荷を輸出入することを得

第二　臺灣は其情形上特殊なる所ありと雖も日本帝國と各締盟國との間に現存する通商及び航海條約則及び其他の諸取極は出來得べき限り臺灣に居住し又は同地に往來する各締盟國の臣民人民及び船舶にも之を適用すべし但前記の特典優益を受する者に於ては常に臺灣に於て施行せらるる所の法令を遵守すべきものとす

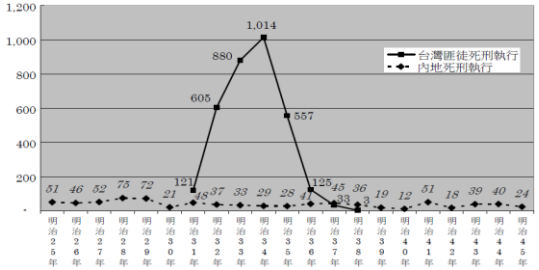
明治29年2月5日　九州日日新聞引用



台湾征討図

第二師団長
乃木希典
当時45歳

混成旅団長
伏見宮貞愛親王
当時37歳



台湾匪徒刑罰令の死刑執行人数と内地死刑執行人数比較（匪徒刑罰令與其附属法令之制定経緯引用）

13 芝山巌精神

日本軍が台湾民主国軍及び義民軍を鎮圧して台湾全土を占領すると、台湾総督府学務部長伊澤修二は「教育こそ最優先すべきである」と提唱し、台北に「芝山巌学堂（しざんがんがくどう）」を設立して熊本県出身の平井数馬（ひらいかずま）ら６名の学務官を派遣した。学務官は台湾人生徒と同じ部屋で寝泊りし、食事も共にして日本語教育だけでなく、日本の礼儀作法を教えた。芝山巌学堂は1896（明治29）年元旦、土匪の襲撃を受け、学務官は殉職、六士先生の教育活動はわずかな期間であったが、彼らが犠牲を払って培った芝山巌精神は日本の教育界を揺るがし、遺志を継承すべく多くの教師が台湾へ赴いた、哲太郎もその一人と思われる。哲太郎はこの事件の２か月後に大原義塾を辞め、台湾子弟の教育、四海同和、日台同化の達成に一生を捧げようと渡台の準備にかかった。「志賀哲太郎傳」では三民主義を実践する好機で渡台とあるが同主義は日露戦争後に生まれた主義であり、渡台の理由ではない。

○學務部
學務官
部長　伊澤修二　長野士

総督府学務部長
伊澤修二　当時44歳

楫取道明
山口県　38歳

関口長太郎
愛知県　37歳

桂金太郎
東京府　27歳

昭和15年発行の嗚呼六士先生
後藤方泉編集引用

中島長吉
群馬県　25歳

井原順之助
山口県　23歳

平井数馬
熊本県　17歳

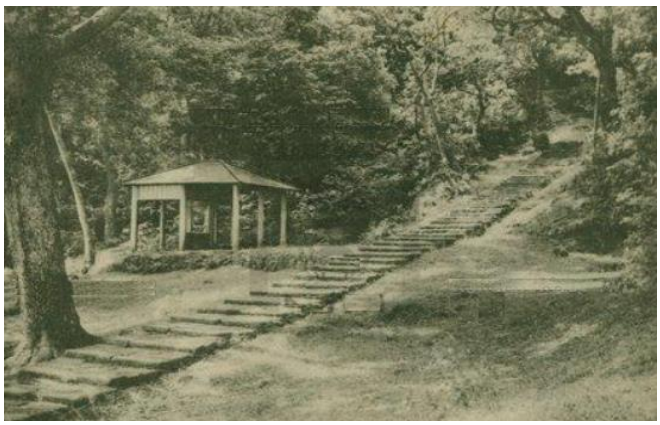
六士先生の墓　H28.2撮影

臺灣教育の聖地に
芝山巌神社
昇格を熱望しての寄附獻金は
麗はし報恩の師弟愛

芝山巌神社
昭和5年台湾日日新報

芝山巖学堂全景（數位典藏與數位學習聯合目錄引用）

学務官僚遭難碑　大正5年撮影（台湾写真帖引用）



芝山巖学堂通路（同左引用）

志賀哲太郎
当時30歳

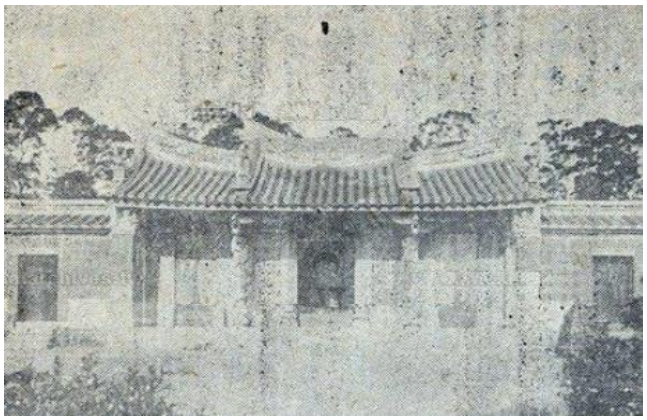
六士先生の歌

作歌 加部巌夫
作曲 高橋二三四

やよや子等 はげめよや
学べ子等 子供たちよ
慕へ慕へ 倒れてやみし先生を
歌へ子等 思へよや
すすめ子等 国のため
思へ思へ 遭難六士先生を

芝山巖学堂に入る生徒（同上引用）

小峰墓地にある平井数馬の墓（白濱裕氏提供）



芝山巖学堂（同上引用）

日本時事評論

教育に命を懸けた「芝山巖精神」

地域便り

愛知県西尾市で慰霊顕彰式

芝山巖精神記事（日本時事評論引用）